
インフィニット・ストラトスさん

次陣村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトスさん

【Nコード】

N8189X

【作者名】

次村陣八

【あらすじ】

今流行のインフィニット・ストラトスを、自分の独自の設定、ネタを詰め込んだ短編集、と言うより四コマまんが的な？原作崩壊、キャラ改変、意味不明、時系統無視など、様々な危険な内容を含んでいるので、気をつけながら見てください。警告タグは全部防リクエスト受け付けます

一次移行？（前書き）

やっちまったZE！

セシリア戦途中からの開始です。

一次移行？

セシリア・オルコットが操る四機のピットを落としたからなのか、俺はどうやら調子に乗りすぎたらしい。

「ブルーティアーズは、六基ありましてよ！」

俺のブレードがセシリア・オルコットの機体に傷を付ける前に、彼女の機体のスカートの部分から、新たに二基のピットがこちらに向かって飛んでくる。

突然の事なので、俺はよけられる筈もなく、直撃を食らってしまった。

が、その時、このIS、白式を装着し始めてから、ずっと表示していた、フォーマットとフィッティングの完成度を示すメーターが満タンになった。

ディスプレイに表示する確認ボタン。それを直撃寸前で押す。

瞬間、頭の中に大量の情報が流れ込んで・・・来ない？

おかしい。確か流れ込んでくると教科書に書いて有ったが。

不審に思っていると、ディスプレイに新たな表示が現れる。

『白式を使用していただき、誠にありがとうございました。無料で使用できるのは初期設定のみであり、プリセット一次移行後の機体を使用するファーストシフト』

には認証キーを入力する必要があります。

今すぐ入力しますか？

はい／いいえ

注：認証キーは、57750円（税込）でお買い求めただけです。
□

え・・・

一次移行？（後書き）

今回で恐らくこの小説というより、短編集の方向性が分かんと思います。

ただただ思いついただけのネタを、文章にして投稿してるだけ。

こんなものでも笑ってもらえたらうれしいです。

11 / 3 誤字脱字の修正

一次移行？（前書き）

前回の続き。

次は遅いかも。

キャラが違う場合、「そういうもの」と認識してもらえばおk
笑）

一次移行？

何とかピット直撃寸前に、機体に予め保存していた認証キーを入力して、一次移行を開始させる。

ファーストシフト

ピットが直撃するが、痛くも痒くもない。煙を巻き上げるだけ。

少しすると、一次移行が完了する。さらに洗練されたフォルムになる。俺に合う様になる。

ファーストシフト

煙が晴れ、セシリア・オルコットが此方を見て目を見開く。

「一次移行！？あなた、今まで初期設定の機体で戦ってたの！？」

ファーストシフト

フリセット

「ああ。だがコレなら負け無い。本当にギリギリだったが、負けられ無い！」

この勝負の為に、筈と一週間もの間、ずっと剣道に打ち込んでいた。負けられる筈が無い。

今の白式の武装リストを見る。

リストが表示される瞬間、ポップアップメッセージが表示される。

『近接特化ブレード『雪片二型』使用可能』

直ぐにメッセージは閉じられ、元々無銘だったブレードが『雪片二型』になる。

『雪片』

これは以前千冬姉がモンド・グロッソで戦った時に使ってた剣。

それを今、俺が握る事になる。

まったく・・・

「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ！！」

横に右手を薙ぎ払う。すると先程まで何も無かった右手に剣―雪片二型―が握られていた。

それを一層力を込めて握りしめ、セシリア・オルコットに突撃しようとうと腰をおとす。それに合わせるように白式からまた、メッセージが出る。

ワンオフ・アビリティ
『単一仕様』

零落白夜使用可能』

『零落白夜』

これもかつての千冬姉が使ってた単一仕様だ。

これで勝てなかったら、千冬姉にも筭にも合わせる顔がねえな。

とか覚悟を固めていると、メッセージはまだ終わって無いのか、続きが表示される。

『使用方法：

地上空間わずに

A
B
『

何故コマンド式！！！！！？

一次移行？（後書き）

11/3 誤字脱字修正

ハロ？（前書き）

ガンダムさんといっ
たらこれでしょう（笑）

ハ口？

突然だが、最近巷では『ハ口』なるロボット人形みたいな物が流行っている。

外見上は緑色の球体なのだが、これが結構すごい。ロボットなので動くのは当然、何と喋ったり、考え事をしたりもできる。

しかも、移動方法が転がるか、手足を出して歩くなど、かなり愛くるしい物で、女性の間でかなりの人気を誇っている。

当然、IS学園は男女共学ではある物の、ISの仕様上、完全なる女子校に等しく、このハ口なる物は、今IS学園ではブームになっている。

さらに、学園側も、機械関連である為か、特に制限も設けておらず、今やハ口は学園内の細やかな風景のひとつになっていた。

「こんな所にもあるのか、ハ口は。」

今俺が居るのは学園のグラウンド。今日もセシリアと箒による鍛錬（と言う名のセシリアと箒の乙女な争い）を終え、散歩中にたまたまここに来た。

「あれ？あつちには確か何も無かった筈だよな・・・」

IS学園のグラウンドは広い。ので、このグラウンドは人工島の隅に位置しており、海の直近くに居る。最も、浜辺ではなく絶壁だが、犯人を追い詰める時に使う奴だ。

俺のが見つかったハ口は、俺に気づいて無いのか、一心不乱にその体をぴょんぴょんと飛び跳ねながら、その絶壁に向かっていく。うむ、本当に可愛いものだ。流行る訳だ。

俺は特に用事もなかったので、ついて行って見る事にした。

暫くぴょんぴょんと跳ねるハ口の後を着いて歩いていると、ハ口が絶壁から飛び降りた。

それを見た俺は、直ぐにハ口が飛び降りた場所に行き、そしてしたを、見てはいけない物を見てしまった。

其処には、ハ口の大群が居た。

それだけならまだ良い。

だが、問題なのは、そのうちの数体のハ口から、腕が生えて居た。

腕と言っても、ロボットの腕じゃない。どう見ても人間の腕である。

しかも、その手には大量の写真が握られていた。

「おい、お前は本音をどう思う？」

「本音さんですか。確かに良い子だとは思いますが、それだけです。ね。自分、ファースト党党员ですから。」

「なんだと、貴様!!!裏切るのか!!!」

何か聞こえ。

「いい加減にしろ!!」

「!!!?」

「織斑先生が一番だろうか!!」

また何か言ってる。

気がつけば、俺は立ち上がり、その場を去ろうとした。だがその時、お約束とも言える展開が起きた。

くるりと踵を返した際に、小石を一つ、したに蹴落としてしまう。

その時の音で、下に居るハ口達は、俺に気づく。そしてそのまま飛び上がり、全員で俺にのしかかる。

*

「はっ!!!!!!」

ガパと握りしめていた布団を跳ね除け、上体を起こす。

右へ左へと目を向け、隣のベッドで眠る簾を視界にいれて初めて、ここが自分の部屋だと認識する。同時に先程見ていた悪夢を思い出す。

「悪い夢だった・・・」

今もまだ冷や汗が止まらない。

ふと自分が眠るベッドの元で転がって居るハロが、自分が起きて居る事に気づいたのか、「ハロ！イチカ！ハロ！イチカ！」と、簾を起こさ無い程度の音量で自分に挨拶する。

それに軽く手を振る事で返事を返し、再び眠りに就こうとした一夏に、ハロが言う。

「バラしたら殺すで。」

自分を殴って気絶した一夏に落ち度は無いと思う。

八口？（後書き）

一人称と三人称が混じってますが、気にしないでもらえると助かります。

11/3 誤字脱字修正

コアネットワーク（前書き）

ネタが浮かび上がる時は出来るだけ早く投稿して行きます。

コアネットワーク

セシリア戦後

白式（以下白）「おゝい、帰ったぜ」

打鉄（以下打）「お、白式さん。ご苦労様でした。はい、お茶。」

白「お！気が利くね。有難くいただいてもらうよ。」

打「しかし、やはり今の操縦者じゃあ、白式さんを上手に扱えませんね。あ、試合見ましたよ！惜しかったですね。」

白「いや、そうでもねえぞ？一夏の野郎には才能がある。鍛えれば強くなれる。お茶おかわり。」

打「へい、今いれてきます。」

一夏「最近白式から何か聞こえるんだけど。何だこれ？」

第「馬鹿な事言っていないでもっと訓練に励め！」

無人IS戦後

白「か、帰ったぜ。(ドサッ)」

甲龍(以下甲)「私も、帰りました・・・(ドサッ)」

打「ちょ！白式さん！？甲龍さんも！何が有ったんすか!？」

白「ぜえぜえ・・・」

甲「はあはあ・・・」

打「ちよつと水を持ってきます。」

5分後

白「はあ！生き返った!」

甲「ありがとう、打鉄。」

打「いえ、そんな。それより何が有ったんすか？」

白「それがさ、聞いてよもう。いい勝負してたのによ、いきなり無人ISが襲ってきてさ、何とか撃退した訳だよ。」

打「それはまた大変でしたね。」

白「しかし、今回一夏の野郎は頑張ったね、あいつのお陰だったよ。」

甲「うちの鈴も頑張ったじゃ無いですか！まあこの調子で恋愛も頑

張ってくればね。」

白「ま、ゴールする事は無いと思うが。」

打「違い無いっすね。」

一夏「鈴、お前誰かに恋したって？頑張れよ！」

鈴「ちょ！あんたがそれを言うな！！」

一夏「？」

VTシステム撃退後

白「はあー」

打「どうしたんすか、ため息なんか着いて。」

白「何で一夏の野郎の近くでばかりイベントが起こるのかなってな。」

打「そりゃ、主人公だからしかあ無いっすよ。」

一夏「いやいや、俺は主人公じゃありませんよ。はい白式、お茶。」

打鉄も。」

白「お、サンキュー。」

打「いただきます。」

一夏「俺も飲もう。」

三人「ずずー」

鈴「ねえ、箒。一夏見かけなかった？」

箒「見ていないが・・・」

コアネットワーク（後書き）

今回は地の文無しなので台本形式をとりました。

1 1 / 3 誤字脱字修正

ハロ？（前書き）

織斑先生キャラ崩壊のターン。
注意して読んでください。

ハロ？

IS学園の屋上は、他の学校と同じく、学生達の間秘密のスポット的な場所である。

有名ではある物、しかし誰もこないと言うのが現状である。

その屋上で、一体のハロが、器用に屋上を囲う手摺りの上でコロコロしている。

そのハロは、他のハロと違い、所々に傷が入っていて、その年期の古さ物語っていた。

そのままハロがコロコロと転がっていると、隣にコツンと音がする。これまた器用に丸い手摺りの上に置いた缶ジュースが発した音だ。

それに気づくと、ハロが止まり、後ろに回転して、来た人物を見る。そこにいたのは、片手に缶ジュースーハロの隣におかれたジュースと同じものーを持ったこの学園で一番人気がある教師。織斑千冬である。

「どうしたんですか？元気が無いようですが。」

「あ、千冬はん。おおきに。」

と答え、ハロは手を出して缶ジュースを開け、ぐいっと一口飲む。

それを特に驚かずに見ていた千冬も、自分のジュースを開けて飲む。

「最近の若いもん見とると、わいはもう潮時やないかとおもつときがあるんや。」

「そんな事はありません！貴方はまだ現役でもいけます！」

珍しく、熱くなって熱弁する、織斑千冬。この年期の入った八口は、彼女がIS学園へ教師となる前からこの学園内に有ったものである。当初の千冬は、軍の教官やってはいたものの、それと教師は違う。教師をやって壁にぶつかった時、いつも彼女を慰め、アドバイスをくれて居たのが、この八口男と呼ばれている八口である。

「せやな。おおきに。少し元気が出てきましたわ。おおきに。」

「いいえ。こんな私の言葉で元気になつてもらえるならいくらでも。」

そういう千冬の顔は、少し赤かったとか無かったとか。

その頃、屋上へ向かう扉の裏側で。

（あの千冬姉が、敬語で喋って居る・・・だと！？）

こんな事を考えている一夏が居たとかいないとか。

八口？（後書き）

11/3 誤字脱字修正

私の嫁（前書き）

キャラ、セリフなどが原作とさり気なく違ってますが、そ言つ物と言つ認識でおkです。

私の嫁

ラウラのIS、『シユヴァルツェア・レーゲン』の暴走から数日後、一年一組に新しい転入生が入る事になった。

今はSHRの時間、山田先生が説明して居る所である。

しかし、妙に戸惑っていると言うか、困っているようである。

「で、では、入ってください。」

これを聞いてすでに待機して居たのか、「わかりました」と言う声と共にガララと開けられる教室のドア。しかし、この声が何処かで聞いた事があるような気がするのは、このクラス全員が思っている事だろう。

そして入ってきたのは、数日前に既に転入し終えたシャルル・デュノア。しかし、着ているのはIS学園の女子制服である。

教室中にざわめきが走る。そんな中、シャルル・デュノア、いや。

「シャルル・デュノア改めて、シャルロット・デュノアです。なまえは変わりましたが、これからよろしくお願いします。」

「と言う訳でデュノア君はデュノアさんでした。うう、寮の部屋割りをもい一度決め直さないと・・・」

シャルロット・デュノアが挨拶する。

これで教室内のざわめきが遂に叫び声の連続になった。

「キヤーーーーー！！シャルル君美少年じゃなくて美少女だった！
！」

「あれ？でも同室だった織斑君が知ら無い筈はないし、と言う事は・
・・」

突然ドアが蹴破られる。

「一夏！！死ねエエエ！！」

飛び込んだ鈴がISを既に展開しており、その肩の衝撃砲は既にチャージが完了し、いつでも撃てる。というか既に撃ってきた。

「iiiiiiiiiiii！！！！？」

それを見た一夏はすぐに横に飛んで躲そうとするが、当然間に合わない。

誰もが一夏が粉々、或いはミンチになる未来を見ていた、が、その直前、ある人物がその怒りの攻撃を止めた。

全員が攻撃を止めた人物を見る。そこに居たのは、ISを部分展開したラウラが居た。

「あ、ラウラ。『シユヴァルツエア・レーゲン』直ったのか？」

「ああ。コアは無事だったからな、予備の部品で組み直した。それよりもだ。」

恐らく鈴の攻撃を止めたのは『シュヴァルツェア・レーゲン』の得意のA I Cだろう。

一夏がそんな事を考えて居たら、いきなりラウラに胸倉を掴まれる。

そのまま引き寄せ、ラウラが一夏の唇を奪うー奪おうとした、それを一夏が咄嗟に横に顔を引く事で躲す。

躲された事に気づき、もう一度実行するラウラ、それをもう一度躲す一夏。

周りがこの展開に追いついていけず、ポカンとして居る時、それはまた数十回繰り返し返される。

そして遂に終止符が打たれる。

躲し続ける一夏に痺れを切らしたのか、胸倉を離し、つい、その顔を叩き飛ばす。

叩かれた一夏は、二、三メートル吹っ飛び、地面に落ちる。

そしてすぐに立ち上がり、叩かれた部分を摩りながら大声で言った。

「二度もぶったな！！千冬姉にもぶたれた事無いのに！！」

場が凍りついたような気がするしたが、そんなことは関係無かったんだぜ！！

その後、ラウラの「私の嫁」宣告と共に結局キスされてしまい、”

何故か” 箒達にもぶたれ、今日一日で数十回はぶたれてしまう。

その時のセリフを少し抜粋して見た。

鈴「アンタ私にぶたれたのもう忘れたって言うの!」

セシリア「どうやらぶたれたいお犬さんが居るようでした、ちゃんと躰をしなければ行けませんわね。」

箒「……………（セリフが無い、理性がなくなつたようだ。）」

私の嫁（後書き）

出席簿アツタクはカウント外として、それ以外では確かに殴られ無
さそうですね。

11 / 3 誤字脱字修正

五反田弾（前書き）

五反田家を書いてみた。

蘭の口調がこれでいいのかが心配。

五反田弾

五反田弾。

織斑一夏の中学時期での親友であり、幼馴染でもある。鈴とも親友で、幼馴染である。

また、実家で「五反田食堂」なる飲食店を経営しており、店長―弾の祖父―五反田蔵の人柄と、確かな味で人気を得て居る。

弾も、食堂の仕事を手伝う事がある。普段は祖父の蔵の大声によって下ろされるが、今日は客が多いからか、弾の妹、五反田蘭が呼びに行って居るようだ。

蘭は、弾の部屋の前に着くと、ノックも挨拶もせずに入る。いつもの事だが、今日は少し不味かった。

「フウウンー!!」

ドス。

直ぐにドアを静かに閉じる。見て無いのだ。お兄が織斑一夏と書かれたラベルが貼られてある呪いの人形的な物を―何処から持ってきたのか―槍を使ってた刺してるのを、絶対に見てない。

（大丈夫。きつとドアの開け方が悪かっただけよ。だから大丈夫。うん。）

もう一度開ける。今度は少し開ける速さを落とす。が、変化は無か

った。いや、有ったには有った。

メラメラメラメラ

またドアを閉じる。自分の見間違いだ。だから自分のお兄が織斑一夏と書かれたラベルが貼られてある呪いの人形的な物を燃やして居る筈が無い。ちょっと服装が、何かの儀式用な気がしたが、それも気のせいに違いない。

（だ、大丈夫。今は多分開けるタイミングが悪かっただけ。今度こそ大丈夫。）

そしてもい一度開ける。そこには自分のお兄が、織斑一夏と書かれたラベルが貼られてある呪いの人形に、槍を持って突撃してつて。

「なんでループしてるの、お兄!!」

五反田弾（後書き）

嫉妬心は誰にもあるということ。

1 1 / 3 誤字脱字修正

五反田弾？（前書き）

弾弄るの楽しい（笑）

五反田弾？

五反田弾。

織斑一夏の中学時期での親友である。今回は彼の中学生生活について書いてみよう。

朝。セットした目覚まし時計によって起こされる。食堂へ向かい、途中で必ず会う妹と一緒に朝食を食べ、着替えを済ませ、学校へ向かう。

途中で合流する一夏と一緒に登校。この時、この朴念仁のお陰でトラブル（女子絡み）が発生する時があるが、その時は二人で解決する。

クラスに到着後、SHRまで馬鹿話で盛り上がる。途中で鈴も交えて更に盛り上がる。途中、一夏が朴念仁スキルを発動しなければ。

それから昼食まで普通に授業を受ける。授業間の休みも馬鹿話で終わらせる。途中、一夏が朴念仁スキルを発動（ry

昼。一夏と鈴と一緒に弁当を食べる。食べた後の残った時間は、同メンバー間の馬鹿話で終わらせる。途中、一夏が朴念仁スキル（ry

午後は、授業を普通に受ける。授業間の休みもやはり同メンバー間の馬鹿話で終わらせる。途中、一夏（ry

帰り、三人で一緒に帰る。その時の気分で弾の実家の食堂で食べるか、鈴の両親がやって居る中華料理店、或いは一夏の家で食べるな

どなど。みんなで楽しく食べ、家に帰る。途中（ry

家。その日に一夏が朴念仁スキルを発動した場合のみ起こる事がある。五反田家の全員が恐ることでもある。

「やってられっか、畜生！！！！リア充死ねえええ！！！！」

五反田弾発狂である。

この時のみ、五反田家のパワーピラミッドは逆転。家族全員で取り押さえても余裕で跳ね飛ばされ、手に持つ何処から出したのか、槍を振り回しながら、額にバンダナ、其れで蝋燭を挟むと言う呪いの儀式の様な衣装に変える。

約三時間位暴れ、その後眠りに付く。

五反田弾？（後書き）

1
1 / 3 誤字脱字修正

八口男？（前書き）

連続更新無理でしたという事。

でも、ネタは出て来たので、後二三回は更新できるかも。

ハ口男？

IS学園には、アリーナが幾つかが建造されている。主に訓練用と、大会などのイベント用である。

そのアリーナには、アリーナ内の非常事態に備えて、非常にハイスペックな通信室がある。非常事態時に、生徒たちへ知らせ、避難させる、或いは各国へ救援を要請するなどに使うのである。

当然、通信機器もハイスペック。

これはある日、第三アリーナの通信室で起こった事件である。

「おい！開けろ！！中で何をして居る！！」

通信室が何者かによって占拠されてしまったのだ。その占拠された通信室の前で、織斑千冬がドアを叩きながら、中の人物に呼びかけて居る。

しばらく待つが、反応は無い。新しい面倒事に顔を顰めながら、もう一度叩こうと手を振り上げた時、聞き慣れた声がした。

ぴよんぴよんと飛び跳ねる音だ。其れを聞いて後ろを向くと、そこには、予想道理、少し年期が入ったハ口、ハ口男がこちらへ来て居る。

「何が起きとるんでっか？千冬はん」

「ハ口男さん！何者かがこの通信室に立て籠もっています。鍵がか

かつて居る様で、開きません。」

八口男の登場に思わず口元が弛みそうになるのをなんとか耐え。返事をする。

それを聞いて八口男は小さく「そうでっか」と返す。

自分の腕を出し、その手に小さい針金を持つ。

その針金を、鍵穴に入れる。

カチカチとしばらくなっていると、直ぐにカチャと鍵が開く。其れに目を見開く千冬。

「あなたは、一体・・・」

「過去の置き土産うちゅうもんや。其れよりも早く入った方がええですわ。」

八口男の過去は、霧に包まれるのみ。

織斑千冬？（前書き）

ブラコンアネキからストーリーカーアネキにレベルアップしました。

織斑千冬？

月曜日の朝、一年一組。SHR前。

教室内で生徒達が賑やかに談笑して居る中、織斑一夏は、教壇の後ろで賑やかな教室を眺めているこのクラスの副担任、山田真耶に話しかけていた。

「あの、山田先生。千冬ね・・・織斑先生が何処に居るのか、知りませんか？」

「知ってますけど、何か用事でも有るんですか？」

「はい。昨日自宅に帰った時に、織斑先生宛の郵便物が有ったから、渡そうと思って。」

昨日、毎週の慣例になっていた自宅掃除をしようと帰宅した時に見つけたので有る。

それを聞いて真耶が、それならと自分が代わりに渡しておくと言い、一夏も其れに従う事にした。だが、彼は知らなかった。彼が自分の席へと向かった時、真耶が浮かべた母性溢れる表情と、「織斑先生の至福の時間を邪魔しちゃいけませんし。」という呟きを。

その頃、寮と校舎を結ぶ道で、一つの八口が跳ねていた。少し年期的に入った八口、八口男である。

寮へと向かう様に跳ねて居るハ口男。その向こうから一夏のセカンド幼馴染、鳳鈴音が走って来て居る。

どうやら寝坊してしまったらしい。それを見て、いち早く理解したハ口男は、ハ口式の話し方で大きく跳ねながら

「リン、アセルナ！マダマニアウゾ！」

とフォローを入れる。

其れを聞いた鈴も、「ありがとう！」と振り返らずにも手を振る事で感謝を示す。

その一連のやりとりをうつとりとした表情で見て居た人物が居た。

織斑千冬である。

道路の両側に植えられて居るそれなりに大きな木の後ろで隠れながら見ている。

しかも、気配を最大限に消しており、まさにコンピューターにも気づかれ無い位の物である。

そしてこのストーキング行為、もとい、尾行はハ口男が寮に入るまで続いたとか無いとか。

織斑千冬？（後書き）

すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません
すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません
ん私が悪かったです申し訳ありませんでした。

11 / 3 誤字脱字修正

織斑千冬？（前書き）

千冬とハ口のやりとりが書いてて和む（笑）

では。後書きにてお知らせがあります。

織斑千冬？

IS学園、寮長室。

文字道理、寮長が使う部屋である。

基本、勝手に立ち入る事は許されず、寮長が許可を下した場合のみ、進入が許される。普通の部屋もそうだが。

まあ、この部屋へ進んで勝手に入ろうとするのは、DMが学園内の新しい生徒か、特定の数名位だろう。

何故なら、この部屋を使っている寮長というのは、織斑千冬である。ブリュンヒルデの称号を持っているとか以前に、普通に鬼教師である為、誰も逆らわ無い。逆らいたくも無い。

そしてこの部屋の前に、一人の男子生徒が立つて居た。IS学園唯一の男子学生、織斑一夏である。彼が上記の「特定の数名」の内の一人である。

彼が此処に居るのは、前回自分のクラスの副担任ー山田真耶ーが彼女に預けた千冬宛の荷物をちゃんと届けたのかを確認する為である。

自分の先生なのと思う方もいるかもしれないが、これは仕方ないと一夏は思っている。

何しろかなり天然な部分がある。とてもじゃ無いが、心配なのだ。

で、数回寮長室の扉をノックする。

コンコンと小気味良い音が鳴り響くが、返事は無い。

不審に思い、ドアノブに手をかざす。ノブを捻って見る。

「あれ？開いてる。」

閉め忘れたのか、それとも何か。ちょうど良いと思い、ドアを開けようとした所で、ふと嫌な予感が脳裏を掠める。

それはもう何処かのNTの様にピーンと音が鳴りそうな位に鮮明な嫌な予感、いや、直感がした。

これを開けてはいけないと。開けたら確実に何かを失うと。

しかしそれを気のせいにし、ドアを開ける。

まず目に入ったのは、こちらにやや斜め方向から背中を向けて居る千冬姉。その手には緑色の球体がある。

「ハロ！チフユ！ハロ！チフユ！」

「おう。私は元気だ。ハロ17382号も、調子は良いか？」

「バッチコイ！バッチコイ！」

「そうか。元気で何よりだ。」

何かその球体としゃべって居る。

呆然としていると、中からさらに声が聞こえる。

「オチャ！イルカ？イレテクルゾ！」

「ああ。なら一杯頼んだぞ。」

「ハロ！ガンバル！ガンバル！」

「マッテ、マッテ！オレガヤル！オレガヤル！」

「こら、31563号。24316号が先に行ったのだ。横取りは感心しないな。」

「ソウダ！ソウダ！」

「アヤマレ！アヤマレ！」

それは正しくカオスだった。

寮長室は普通の寮室よりも少し広い。しかし、その広い部屋でさえ狭いと感じる。

それだけの数のハロが居たのだ。

見つかる前に出よう。そうだ、そうしよう。絶対にその方が良い。荷物は山田先生を信じよう。人間関係の潤滑剤は信頼だ。

ドアに再び手をかざし、そのまま一歩後ろに下がる。しかしどうやら強く踏みすぎたらしい。ドンという大きな足音がした。

「っ！！誰だ！！！」

それを聞いたのと、ソレが起きたのは同時だった。

夥しい数のハ口が一夏に向かって雪崩れ込む。

その重みを感じながら、混乱の末、失って逝く意識で茫然と

（ああ、本当の事だったのか。）

こんな事を考えて居たとか無いとか。

織斑千冬？（後書き）

さて、お知らせですが、今回からリクエストを受け付けて見たいと思います。もう本当にネタが切れかかって居る。もう弾と蘭の話しか思い浮かばない。

一夏とヒロインズの話が何故か全然思い浮かば無い。

ので、そっち関連でネタを募集します。期限は特に設けておりませんので、気軽に感想欄か、メッセージを送ってもらえると嬉しいかな、みたいな？

後、八口男さんの関西弁、間違いだらけだと思うので、正しい言い方を教えてもらえると助かります。

これらとは関係なしに感想、誤字脱字の指摘も随時受付中。ユーザ―登録無しでも書けます。

長くなってますいません。

卵（前書き）

すみません。最近バイオ4卵縛りプレーをやりすぎました（笑）

卵

@クルーズ。

IS学園の近くの駅前のデパート内にある喫茶店である。

ただし、ウェイターやウェイトレスはそれぞれ執事服、メイド服を着用しているイメージ喫茶店、平たく言えばメイド& amp ;執事喫茶だ。

普段はそれなりに賑やかな店内なのだが、今は数人を除いて全くの無声である。

何故か？店の入り口前に立っている三人組の所為だろう。

その三人、頭に、目と口に位置する所に穴を開けている靴下の物を被り、手に銃器を持っているという、些か古典的な三人組である。だが、たとえ古典的だとしても、その手にはハンドガン、ショットガン、サブマシンガンと、かなりメジャーな三種類の銃器を持っているので、危険があるに変わりはない。

そんな中、執事服を着込んだシャルロット・デュノアはどうしたものかと考えていた。

シャルロットは今日ラウラと一緒に買い物をして、このデパートへやって来たのだ。

ランチを食べている間に色々起こり、なんやかんやで今日一日だ

けバイトする事になった。そしてこの騒動に巻き込まれた。

「どうした？急に静かになったな。」

と言いながら、店の奥から出て来たのは、ラウラ・ボーデヴィツヒである。その片手には卵が三つある。

バイト途中、ラウラのあまりにもあまりな接客態度のため、裏方に回ってもらったのである。かなりの客が残念がって居たが。

そのラウラが入り口前の三人に気づく。その三人もだ。だが特に警戒せず、何やら話し込んでいる。

ラウラは、三人組の意識が自分に向かって無いのを見ると、直ぐに片手にある卵一つを三人組のリーダーらしき人物――一番前に立ち、ハンドガンを持っている方に投げつける。

その卵は寸分変わらず、リーダーの目間に叩きつけられる。その衝撃で破裂し、中身をリーダーの顔に盛大にぶちまかれる。

「な、なんじゃこりゃああああ！！！！」

手で顔に飛び散る汁を掬い、見た時のリーダーの反応である。バツチリ混乱している。隣にいる二人も、状況を掴みかねている。

その隙にラウラはリーダーに急接近し、側顔面に蹴りを叩き込む。その時何か白いうわ、何をする！やめ（ry

蹴る途中、自分の右側にいる男―ショットガンを構えている―の手に卵を叩きつける。その衝撃で銃を落とす。

その男が銃を拾おうとする隙に、自分の左側の男―サブマシンガンを持っている方―に足払いをかけ、転ばせる。

自分の右側にいた男は銃を拾い、ラウラに向けようとしたが、さっきまで見ていたシャルロットに蹴られ、前のめりに倒れる。

その後30秒足らずで来た警察官に三人組を引き渡し、この事件は無事に収束した。

「ねえ、ラウラ。その卵を投げるってやり方、何処で習ったの？」

「教官から教わった。」

真面目顔で返されて、シャルロットは「そう」と苦笑しながら返すしか無かったという。

織斑一夏？（前書き）

この小説における一夏くんの立ち位置は苦勞人で決定。弾に苦勞させてるのにね（笑）

今回の話は、自分なりに原作イベントを集計して見た。笑どころはないかも。

織斑一夏？

織斑一夏の夜は早い。いつも9時前後で眠りにつく。

しかし今日は何故か妙に寝付が悪い。いつもなら布団に入り、一分も経たぬうちに眠りにつく筈なのに、今は数分経っても全然思い浮かば無い眠れる気がしない。

しかし、やる事も特になく、自分よりの机の前の椅子に座り、電気スタンドを付ける。

電気スタンドの明かりは辺りを照らしはするものの、靄がかかったような、何処か幻想的な雰囲気を作り出している。

（しかし、IS学園に入ってから色々あったな。）

入学早々、イギリス代表候補生、セシリア・オルコットとの決闘。認識コード最初から入っててよかったよ。じゃなきゃもっと早く落ちてただろうからな。零落白夜のコマンドも最近慣れて来たし。その後仲良くなれたのも僥倖だったな。（惚れられる）

その直ぐ後にセカンド幼馴染、風鈴音の転入。クラス代表戦。

その代表戦中にいきなり現れた無人IS。それを鈴との共闘で撃破。鈴とも仲直り（惚れ直される）。

その後にシャルロットー当時はシャルル・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒの転入。いきなりラウラに殴られたつけ。

タッグトーナメント戦前に、ちょっとした事故で、シャルルが女の子である事を偶然知ってしまって。あの時は焦ったな。

で、アリーナで鈴とセシリアがラウラにフルボッコされるのを見て、ちよつと抑えられずに、零落白夜でアリーナのシールドを破いて突っ込んだな。そう言えばアリーナの遮断シールドも切り裂けるって、どんだけ凄いんだよ、零落白夜。

タッグトーナメント戦で箒とラウラと戦って。途中でいきなりシュヴァルツェア・レーゲンが暴走しちゃって、それを止めて。あの時シャルルが居なかったら危なかったな。

その後の臨海学校では銀の福音の暴走。一回落ちちまったよな。あれが三途の川だと思うと、よく渡らずにふみとどまったな、俺よ。

で、その時に、これを手に入れた。

そう思いながら、一夏は自分のてについてるガントレット―白式を見る。

二次移行した白式。セカンドシフト 二次移行時に色々あったけど。セカンドシフト

本当にいろんな事が起きた。

ドゴッ

「ぐおー！」

感極まっていると、突然腹部に衝撃を受け、椅子ごと後ろに倒れる。

倒れた時に打ち付けた後頭部を摩りながら起き上がると、机の引き出し部分が何故か独りでに開き、中からうさ耳がある。

取り合えず、俺は放置してねむる事にした。最近何故か痛み始めた胃を摩りながら。

織斑一夏？（後書き）

さて、突然だがこの小説は結構フリーダムだと思っている。実際そうだが。なのにもかかわらず、すでにPV13000直前、ユニークも2000を超えている。

皆様に感謝です。

因みにリクエストの方も、一夏&ヒロインズじゃなくてもいいので、受け付けます。感想も勿論お待ちしております。

では、また次回。

タバネエもん・会おう前 篇（前書き）

思った以上に難産。理由不明。短い。

一応、初長編（他のに比べて）のプロローグ的な。

タバネエもん・出会う前篇

「これ、やっぱり抜かないといけないのかな。」

土曜日の朝。織斑一夏の呟き。

前回、無視したウサミミは、一晩経っても消えなかった。むしろ、「はよ引っ張れや」的なオーラを感じる。

このまま放置しても、いつまでも消えそうにない。ので、しょうがないく、引っ張る事にした。

「ふんっ！おっと。」

両手を使って引っ張るが、どうやら固定されてないらしく、簡単に抜けた。力を入れすぎた反動で後ろに倒れそうになるも、なんとか踏み止まる。

「何も起きない・・・のか？」

3分位待っても、何も起きず、引き出しの中を繁々と覗くも、何も変化が無い。

なんだ。と思いながら机から背を向き、着替えようとした。した所で、変化が起きた。

突然、引き出しから光がピカーとい音と共に溢れ出し、ガタガタと震え出す。

それを聞いて驚き、振り返る一夏。

「ふぐう!!」

何かが顔面直撃し、そのまま気絶してしまった。

（なんか、柔らかい。）

とか思いながら。

タバネもん・会合前 篇（後書き）

天災の名前の読みってタバネ？それともタバネ？自分はずっとタバネと読んでますが。

織斑千冬？（前書き）

もう、このままゴールしても良いよね・・・

評価点50ポイントオオオ！！！！

織斑千冬？

織斑一夏は、今自分の目の前の景色を信じられなかった。

屋上へと向かうドアを少しだけ開き、屋上をドアの後ろから覗く感じになっている。

その屋上に、二体のハ口がいた。片方のハ口は、色の艶がよく、真新しいのを見ると、どうやら最近、新しく入ったらしい。もう片方は、既に艶を失っている緑色の、所々に傷が入っている、年期の入ったハ口、ハ口男だ。二体は何やら会話をしているようだ。

それだけならまだいい。よく見かけるものでもある。

問題は。

「あの、それで、コレはどうすればいいのですか？」

「そら此処こう回して、こうせなよか。」

「お、おおー！」

片方の声が、どう聞いても、自分の姉にしか聞こえなかったら、そりゃ信じられなくもなる。

「あ、そこちゃうで、こうせなあかん。ほれ。」

「おーちゃんと動いたー！」

結局、その日は、織斑先生による授業は、全て山田先生が代理で行ったという。しかも、文句全然なしで。

社長？（前書き）

徐々に内容が力オスになってきた。しかしそれと反比例する文字数。
どうすればOrz

今回は人によつては不快を感じるかも知れません。今更ですが。

社長？

デュノア社。

現在世界各地で使用されているＩＳ量産機である「ラファール・リヴァイブ」を開発した会社である。

本日は、この会社の社長様の一日を見てみよう。

朝、五時に起きる。そのまま支度を１０分で終え、出掛ける。

車で二十分間掛かるシャルロット・デュノアとその母が暮らす家に着く。

郵便入れに、適当な理由での賞金と偽った仕送り金を入れる。

家の周辺に潜伏し、自分の娘、シャルロットを陰から見守る。それはシャルロットが学校に到着する七時まで継続する。

七時二十分、一度本邸に戻り、陰から見守る用の服を脱ぎ、仕事着に着替える。仕事に必要なものを持ち、朝食を済ませ、七時四十分、会社へ向かう。

八時頃に会社に到着。三十分で書類仕事を終える。

一時頃でその日必要な仕事を全てこなし、会社を出る。

そして一旦帰宅して、陰から見守る用の服を着て、シャルロットが通う学校の近くで待機。この時、一週間に五回位は通報される。

シャルロットが校門から出ると、その後をこっそりと見守る。この時、誰かがシャルロットをナンパしようものなら、状況を見て、お話からO H A N A S I、物理的半殺しや社会的全殺しされる。

その後、シャルロットが帰宅するのを見て、自分も帰宅。

夕食を済ませ、寝る前に「シャルロット・デュノア様を陰から見守る会」の会長としての仕事も済ませ、眠りにつく。

社長？（前書き）

シャルがない間に、こんな事が起きてるんだぜ？の巻。

社長？

デュノア社。

現在世界各地で使用されているIS量産機を生産している会社である。

その会社の社長室で、デュノア社の社長が、淡々と書類仕事をこなしていた。

但し、この社長を知らない人がみれば、とても仕事をしているようには見えないだろう。

目の前にあるデスクの端っこに積み上げられた書類を、目にも留まらぬ早さで一枚抜き取り、無表情なままそれを一秒にも満たさない早さで読み終える。

頭の中で三回程、半秒以内で考え、サインするものはサインした後、もう一つのしよるいのやまのいちばんうえにおく。しないものは素早く丸め、ゴミ箱の中に放り込み。

そしてまた一枚、抜き取る。

常人には真似できない速さで仕事をこなす、その動力源は、どう示せばいいのか分からない自分の娘、シャルロット・デュノアに対する愛である。

積み上げられた書類が半分をきた頃、突然、社長室のドアがバン！と開かれる。

ドアを開いた人物に、尚変わらない無表情で見つめる。見たことのある顔だ。

「娘を、シャルロットをください！！絶対に幸せにして見せます！！！！」

この少年の本日三度目の来訪である。年は16位だろう、ヨーロッパでは珍しい、黒い髪に同色の瞳は、決意の色を強く表している。その言葉に、一度筆を置き、手を顎の下で組み、それに頭をおく。いつもかけている無色のメガネが光を反射し、表情が見えない。

「君に出来るのかね？」

世界的に有名な会社の社長だけあって、かなりの威圧を少年に向けてかける。

その威圧を一身に受け、それでも尚、動揺せずに大声で返す。

「できます！やって見せます！！」

その答えを聞いて、フツと笑い、口元を僅かに吊り上げる社長。

「ならばそれを私に示してみろ！」

デスクを飛び越え、その拳を握りしめ、少年に向かってかけ出す。デスク上の書類に被害は無い。

それをみて、少年も拳を握りしめ、向かい打つ。その熱い戦いは、

30分間、続いたとか無いとか。

モエレ（前書き）

知っている人は知っている伝説の名空耳。一応原作名に入れましたが、多分今回きり。

モエレー

気がついたら、浜辺にいた。

ーモエレーモエレー

綺麗な青空、煌めく蒼海、白い砂浜。そんな夢のような浜辺だ。

ーモエレーモエレーモエレー

前後左右へ、無限に広がる。しかし不思議と恐怖は感じない。

ーモエレーモエレーモエレーモエレー

ふと、波が届かない、しかし海に近い場所で座る少女を見つけた。

ーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレー

近づくと、何やら口ずさんでいる。

ーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレー

俺は何故か、声をかける気にはなれず、その後ろに立っている事にした。

ーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレー

.....

ーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモ
エレー

．．．．．

ーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモ
エレーモエレー

モ．．．

ーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモ
エレーモエレーモエレー

モ．．．モモ

ーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモエレーモ
エレーモエレーモエレーモエレー

モエレー．．．

モエレー（後書き）

最近は自分もよく、歩いてると気に口ずさんでしまいます。結構大きな声で。

コレ病院に行った方がいいのかね。

織斑千冬？（前書き）

やはり関西弁難しい。

此の方が正しいって言うのがあったら教えてもらえると嬉しいで
す。

織斑千冬？

IS学園は全寮制である。当然と言えば当然ではあるが。

その中、週末と言う貴重な外出機会が来ると、大半の生徒が行くところがある。

@クルーズがあるショッピングモールだ。駅と一体化しており、尚且つ広く、品揃いは豊富。なのでみんなこぞってくる。

織斑一夏も例外ではなく、食材、生活用品、衣類など、次の一週間に必要な物をこの日に買い備える。

その時、いつものメンバーの内の一人が付いてくるのは当然。此方が頼んでいなくとも、勝手についてくるので、一人より二人の原則に沿って、一緒に買い物をする。今回はシャルこと、シャルロット・デュノアがついている。二人とも両手に買い物袋を持っていて、既に買い物を終えているようである。

いつもなら、そろそろ寮に一回帰って荷物を置いて、自宅の掃除を済ませるべき時間なのだが、今日は違った。

「あれは千冬姉なのか？」

何もIS学園の生徒だけがこのショッピングモールを利用するわけでは無い。教師も必要があれば、当然する。だから別にこの場に千冬姉がいても何らおかしくは無い。

だが、今見ている千冬姉の背中には、普段――IS学園に入学する前

「では考えられないような雰囲気を感じる。何かかなりのハイテンションな雰囲気だ。」

だから、手に持つ買い物袋も、後ろについて来ながら文句を言っているシャルを無視しながら後をつけ始める。

「ねえ、一夏。聞いて・・・あれってもしかして織斑先生？」

一夏に呼びかけていたシャルも、前方で歩いている千冬姉に、特にその雰囲気のに気づいたのか、驚きながら此方に聞く。前で歩いている千冬姉にはれないよう、音量を抑えて。

「うん。そう・・・っと、あの店に入ったぞ。」

見れば千冬姉は、このショッピングモールでそれなりに人気のある店に入った。

それを確認した二人も、少し時間をずらしてはいる。

店内で千冬姉の姿を探す。店の入り口から少し中の方に置いてある衣類品を見ているようで、その背中が見える。それを何とかばれずに接近する。

「これはどうだろうか？」

どうやら悩んでいるらしく、声に出して考えてい

「それよかこっちはどうや？中々凝つとるデザインやで？」

る？何か、最近妙に聞き慣れた声が聞こえる。

「ほう。確かにこれも中々・・・」

何とか千冬姉の横方向に回る。今まで組んでいたと思われたては、確かに組んではいるものの、中にすっぽり入るように、ハローと言うより当然ハロ男がいた。

「あ、しかしこの値段が・・・」

「何やったら金出そか？わいが勧めたもんやし。」

「い、いえ、」

「ええねん。綺麗な人は綺麗なもんがおうとるよ。せやからわいが勝手に出しとっただけや、気にせんという。」

「綺麗つ・・・！」

・・・

「アレって千冬姉だよな。」

「普段と違うけど、織斑先生だよ。信じられないけど。」

耳まで真っ赤に染めて恥ずかしがるという、普段では絶対に見れない姿を見て、つい、隣のシャルに聞いてしまった。

その後も、店のほぼ半分を回り、千冬は手に持つー結局ハロ男が勧めたものしかなかったー服をレジに渡す。

ハ口男も両サイドから手と一緒に財布も出し、代金を支払う。

それを特に驚きもせず、無反応に代金を受け取り、支払い終えた服を返す。

受け取り、帰る千冬の背中中は、来たよりもさらに浮いた雰囲気、それこそ今にもスキップしそうだ。

そんな背中を、一夏とシャルは、只々茫然と見ているしかなかった。

「結局何だったのかな？」

「僕に聞かないですよ。知らない。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8189x/>

インフィニット・ストラトスさん

2011年11月24日12時01分発行